

私のカルテ

No. 392

胃がんについて

津島市民病院
外科医師余語
孝乃助

はじめに

胃がんとは、胃の粘膜から発生した悪性腫瘍のことをいい、日本では年間約13万人に見つかっています。若い方の罹患率は年々下がってきていますが、高齢化の影響で罹患率は増えており、男性で2番目、女性で4番目に多いがんとなっています。

原因

ピロリ菌感染や喫煙、塩分の多い食事が胃がん発生の危険性を高めると報告されています。胃がんの罹患率が下がってきたのはピロリ菌感染が大幅に減ったことが理由と考えられています。ピロリ菌感染のある方は除菌治療を行うことで胃がん発生の危険性を減らすことができます。

症状

みぞおちの痛みや違和感、胸やけなどの症状がある場合があります。胃がんから出血することで貧血になったり、便が黒くなったりすることがきっかけで見つかる場合もあります。しかし、これらは胃潰瘍や十二指腸潰瘍にも共通する症状で、胃がん特有の症状はありません。また、症状が全くないことも少なくありません。

診断

胃がんを見つけるためには、バリウムを使ったレントゲン検査と胃内視鏡検査があります。疑わしい病変を見つけた場合には、胃内視鏡で病変の一部を採取して顕微鏡検査を行い、がん細胞を証明することで診断します。胃がんと診断された場合、CTでがんの広がり(他の臓器やリンパ節への転移の有無)を調べて、進行度を判定した上で治療方法を決定します。

治療

治療の基本は、内視鏡または手術によって病変を完全に切除することです。胃の表面に限局しているごく早期のがんであれば内視鏡的に切除可能ですが、胃壁の深くまで深達していたり、胃周囲のリンパ節への転移が疑われる場合には手術が必要となります。術式は、胃のどのあたりに病変があるかや、その進行度によって決定します。大まかに、胃の中～下部の病変であれば下2/3を切除する幽門側胃切除術、上部や広範囲の病変であれば胃全摘術を行います。切除した胃は、顕微鏡検査を行い、深達度(胃壁のどれくらい深くまでがんが達しているか)やリンパ節転移の有無を評価して最終的な進行度が決定します。その進行度によっては、再発予防のための抗がん剤治療を術後に行います。手術では切除できないほど進行した状態であったり、術後に再発した胃がんに対しては、手術は行わずに抗がん剤治療を行います。

おわりに

胃がんは早い段階で見つければ、より体への負担が少ない治療が可能であり、また完治の可能性が高くなります。40歳台から胃がんの罹患率は高くなる傾向があります。早期発見のために、40歳を超えたら胃がん検診を定期的に受けるようにしましょう。

